



TITLE:

下北半島におけるニホンザルの生息環境としての森林の植生構造と森林施業(III 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

荻野, 和彦

---

CITATION:

荻野, 和彦. 下北半島におけるニホンザルの生息環境としての森林の植生構造と森林施業(III 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1976, 6: 36-37

ISSUE DATE:

1976-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162706>

RIGHT:

2. 平岩真理子・長谷川寿一。1976。高岩山第Ⅰ群調査報告(1)ポピュレーション構成。第20回プリマール研究会。
3. 岩野泰三・高杉欣一。1975。房総丘陵のニホンザル、千葉県生物。pp. 108-119。日本生物教育会第30回全国大会(千葉大会)実行委員会。「千葉県の生物」編集部編。
4. 小金沢正昭・高杉欣一。1976。房総丘陵におけるニホンザルのフンの形態の季節変化。第20回プリマール研究会。

## ニホンザルにおけるオスとメスの特異的な空間的近接



北村 光二(京大・理)

高崎山A群、B群の観察を通じて、それぞれの群れの内部において、オスとメスとは単にランダムに寄り集まっているのではなく、特定のオスと特定のメスが特異的に近接するように存在していることに注目して、この現象を集中的に記載した。

この社会現象の記載において、対面的相互作用は1種のコミュニケーションの過程として扱われた。挙動を呈示する個体は情報の送り手であり、対面する他の個体はその受け手である。従って、1) これまである1つの社会現象として記述されてきた事柄は、その相互作用に参加しているそれぞれの個体にとっての状況として、それぞれに記載された。2) 観察者の抱いた印象は、そのような情報を受け取った第3者の反応として、個体の行動の記載と並置して記載され、考察の手がかりとなった。

このような視点を用いてなされた記載からこの現象の一般的特性が抽出された。1) メスが特定のオスに一方的に追従する。2) あるオスに特異的に近接するメスは、個体維持におけるアドバンテージを獲得している。これは、メスがそのオスに近接していない時に比べて近接している時に、より優位な個体としてふるまうことができることを意味している。従ってこれは、\*近接の効果、と名付けられる。3) オスとそれに特異的に近接しているメスとの間にはさまざまな程度で親密さが認められるが、それは\*近接の安定性、の漸層的差異として区別される。

そして次のような、ニホンザルの社会の一般的特性についての討論が可能になる。1) 劣位な個体が優位な個体に近接しようとする活動が一般的に存在する。これは\*フォロワーシップ、と名付けられる。2) この活動は\*近接の効果、を先取りしている。3) \*近接の安定性、は\*近接の効果、を顕在化させる。このことは順位形成の過程を理解する手がかりとなる。

## 香春岳におけるニホンザル野生群の生態学的研究



池田 啓(九大・理)

江口 和洋(同上)

香春岳では1974年以来、個体数の変動、遊動域の変化を中心に捕獲後の追跡調査を継続している。1975年は4月と9月に各10日間の調査をおこなった。

### 1) 個体数

4月の調査ではカウントをすることができなかったが、9月27日に群れが車道を15:24~16:00にかけて渡り、A♂4, YA♂1, A♀10, 4才3, 3才2, 2才3, 1才3, Baby 8, 合計33頭が数えられた。9月28日に同じ場所で9:45~10:50にかけて、A♂2, YA♂2, A♀8, 4才0, 3才2, 2才2, 1才2, Baby 7, 合計26のカウントができた。前年からひきつづき出生率が高く個体数は増加傾向にあるものと思われる。

### 2) 遊動

4月、9月とも群れはある地域に数日にわたり滞まる傾向を示した。4月には12日から23日にかけ、香春岳の西側に位置する五徳地区の竹林、9月には24日から29日にかけてムクを中心に採食して香春岳の二の岳東斜面にある神宮院一帯を群れは遊動していた。1日当りの遊動距離は4月で最短0.53km, 最長0.87km, 調査期間中の平均0.71kmであり、9月で0.15~0.82km, 平均0.44kmであった。捕獲の同じ月における遊動距離は1973年4月12~23日で0.68~2.30km, 平均1.53km, 1972年9月27~30日で0.82~2.13km, 平均1.59kmであった。4月、9月とも1日当りの遊動距離が捕獲前のものと比べかなり短くなっている。このことはa) 群れが一定地域に数日にわたり定着しているなど遊動パターンがこれまでとちがってきている。b) 植生には捕獲前と後で大きな変化がないにもかかわらず遊動域の広がり狭くなっていることによるものと思われる。

## 下北半島におけるニホンザルの生息環境としての森林の植生構造と森林施業

荻野 和彦(京大・農)

下北半島のブナ・ヒバ林がニホンザルの生息環境として、どのような植生構造をもち、そこでなされる森林施業がどのような影響を与えるのかを明らかにするため、前年にひきつづき調査をおこなった。

調査地域は下北郡大畑町、大間町、佐井村にまたがる。前年度に設定した6コの永久調査プロットにつけ加え、あらたに2コのプロットを設けた。合計8コのプロットはブナ択伐、漸伐施業区、ヒバ択伐施業区および無施業区から選びだされたもので、プロット内の全立木の

階層構造、樹冠投影図が記録され、胸高直径、樹高はひきつづいて測定対象とされるものである。

森林施業は林冠層を疎開させ、林床をかなり攪乱する。林内環境の変化が植生にどのような影響を与えるのか。下層植生が陽性化するのは一時的なものかどうか。上層植生への影響は樹種交代、優占種の交代にまでおよぶのかどうか、植生の回復過程はどのような経過をたどるのか、などの点が各施業区の永久調査プロットのくりかえし調査によってあきらかになるはずである。

今年度は継続調査の一環として、データの蓄積過程にある。前年度調査の結果とくらべて、樹高、胸高直径の測定値から生長量を算定するには、測定精度が十分でない。さらに調査をつづける必要がある。

ニホンザルの生息域内では、上述の施業のほか、皆伐による人工林化もすすめられている。地域内全体にわたる植生配置のありかたと、施業の進行にともなう変化の動向を予測することも重要な課題となるであろうことは疑えない。ニホンザル行動範囲の確実な推定ができるのをまて、この点に関する考察にも着手しなければならないと考える。

#### 箱根地域個体群の分散について

○	村松 正敏 (マカック研究会)
	田 中 進 (同上)
	福田 史夫 (同上)
	小林 紀子 (同上)
	岩淵 幸子 (同上)

昭和49年度、50年度の共同利用研究の報告をする。49年度は群れからの個体の分散をそれまでの継続調査として年次変動の追跡を、50年度は群れの遊動時の広がりや周年変化を知る目的で調査した。なお地理的変異の一環として、合わせて体重の測定を実施した。

方法：いずれも個体識別による直接観察による。

調査結果：(1) 群れからの個体の分散。1975年11月までの過去10年間に調査地域内に観察されたオトナのオスは106匹であった。群れに所属する数は常時平均10匹で、群れの大きさ、個体数変化に相関しなかった。5群中2群に生まれたオスの1歳までの生存率は63%、そのうち2匹を除く他の63匹はすべて出身群を離れ、他の近隣群に加入した率は73%であった。なお離脱オスのうち2匹は60km離れた伊豆半島伊豆群に加入していた。

(2) 遊動時の広がり。例年通り冬期はコンパクトな集まりをつくり、わずかに配偶関係による小さな集まりが群れから離れた。オスグループは主群に最も接近した。春期はオスグループのみがやや主群から離れがちだった。夏期、特に出産期に群れは2つに分節化する傾向に

あった。分節グループ間隔は1kmにも達した。オスグループはほとんど独立行動をとった。秋期は分節化も夏期ほどではなかったが例年よりまとまりを欠く集まりをつくっていた。

(3) 体重。オトナのオスは12kg平均、メスは9kg平均の値を得た。年齢毎の比較では、6歳と7歳、7歳と8歳が体重差が大きく、メスでは4歳と5歳が最も体重差があった。

<考察>(1) すべてのオトナのオスは群れ生活と単独生活をする。それぞれの生活期間の比は1対1である。その結果多くの群れでは群れ社会性比が1対1になるとおもわれる。

(2) 群れの分節化には交尾期の配偶者同士からなる小グループと、出産期の親密な同士からなる大分節グループが観察されていて、大分節グループの一方は30匹平均で安定していた。この傾向は、オトナのメスもオトナのメス同様10匹前後の安定したまとまりをもつ傾向を示唆している。オスとメスの体重からみた成長期は2年の差異があると考えられる。

なお今回の報告に示された数値は、研究グループの原データが大部分未整理のため、すべて村松による。

#### 日光に生息するニホンザルの分布と生態

##### —ニホンザル保護管理の立場から—

○ 常田 邦彦 (東京農工大・農)

#### (1) 研究の目的

ニホンザル地域個体群の分布の現状とその歴史的変遷を明らかにし、あわせて環境利用等に関する生態調査をおこなう。

#### (2) 研究の計画

イ) 日光市、栗山村、足尾町について聞き込みによる分布調査をおこなう。

ロ) 表日光地城について毎月入山し、直接観察およびフィールドサインのチェックによる生態調査をおこなう。

ハ) イ)、ロ)と関連して土地利用の変遷を調査する。

#### (3) 研究の経過

哺乳類分布研究会による関東地方の中、大型哺乳類の分布調査と協力し、昭和50年8月14日～8月23日の10日間、日光市、栗山村、足尾町およびその周辺地域について、聞き込みによる分布調査を実施した。表日光地城については、昭和50年7月28日～7月31日の4日間および昭和51年1月7日～1月9日の3日間、生態調査をおこなった。また、土地利用の変遷を知るために、表日光地城の航空写真を購入し、あわせて関係官庁より資料を蒐集した。これらの結果は現在整理中である。